



Data 2022-134

監督：ヴァディム・パールマン
原作：ヴォルフガング・コールハーゼ
出演：ナウエル・ベレーズ・ビスカヤート／ラース・アイディン
ガー／ヨナス・ナイ／レオニー・ベネシュ／アレクダンダー・バイヤー

👁️👁️ みどころ

語学の学習は難しい。ペルシャ語のマスターには努力と根気が不可欠だ。すると、ナチス親衛隊ながら、戦後テヘランでレストラン開店を目指している生真面目なコッホ大尉なら！ やっと見つけた教師・ジルは本当にペルシャ人？ それとも、ユダヤ人が生き延びるために真っ赤な嘘を？

構想は面白いが、それを物語とし、映画化するのは到底無理。私はそう思ったが、何の何の。違和感は全くなく、緊張の連続する物語は見応え十分だ。

『聖なる嘘つき その名はジェイコブ』（99年）のラストは感動の涙を誘ったが、本作のラストは？ ジルの脱出成功は万々歳。他方、スーツ姿でテヘラン空港に降り立ったコッホは、「レストランを開くためにここに来た」、と自慢のペルシャ語で説明したが・・・。



■□■ “ホロコーストもの” 初の“バディもの” が登場 ■□■

私は、自著『ヒトラーもの、ホロコーストもの、ナチス映画大全集 一戦後75年を迎えてー』（20年）の中に計72本を収録したが、“バディもの” は一つもなかった。今年のNHK大河ドラマ『鎌倉殿の13人』は三谷幸喜が脚本を書いた、北条義時を主人公とした群像劇だが、彼には『笑の大学』（04年）（『シネマ6』249頁）という“バディもの” の名作がある。

同作の時代は昭和15年。治安維持法に基づく思想統制や検閲制度によって「表現の自由」が抑圧されていた嫌な時代だ。同作の一方の主人公は笑いを憎む検閲官の向坂。他方の主人公は笑いを愛する劇作家の椿だから、その相性は最悪だ。また、舞台は大衆芸能のメッカ、浅草だが、スクリーン上のほとんどは向坂と椿の対話劇で構成される密室劇だ。向坂から、「外国人の登場はダメ。」と要求されると、椿は仕方なく『ロミオとジュリエット

ト』を「貫一とお宮」に変更したが「接吻場面はダメ。」と要求されると・・・？三谷幸喜の演出によるそんな“バディもの”は面白かったが、まさか“ホロコーストもの”に、“バディもの”が登場してくるとは！

ヴォルフガング・コールハーゼの短編にインスピレーションを受けて脚本を書いたという『ペルシャン・レッスン』と題された本作は、強制収容所に収容されたユダヤ人青年ジル（ナウエル・ペレーズ・ビスカヤート）とナチス親衛隊のクラウス・コッホ大尉（ラース・アイディンガー）の“バディもの”だ。立場が正反対のジルとコッホ大尉の間でバディものが成立したのは、ペルシャ語を学ぼうとしていたコッホ大尉が、ペルシャ人と偽ったジルからレッスンを受けることになったためだ。検閲官と劇作家の間では力関係は圧倒的に検閲官が上だが、捕虜収容所の中での優劣は当然コッホ大尉が上。しかし、ペルシャ語学習の先生と生徒という立場になれば・・・？

■□■ウソは悪い？いやいや、嘘にはいい嘘も必要な嘘も！■□■

嘘つきは泥棒の始まり！この言葉に代表されるように嘘はダメ。それは親が子供に教える最初の価値観だ。しかし、本当に嘘は悪いことなの？いやいや、嘘にもいい嘘も！さらに、必要な嘘も！そのことは、ホロコーストもの名作中の名作『聖なる嘘つき その名はジェイコブ』（99年）（『シネマ1』50頁）を見れば、よくわかる。また、本作導入部のストーリーを見ても、占領下のフランスでナチス親衛隊に捕らえられたユダヤ人たちが全員射殺されていく中、咄嗟に「俺はペルシャ人だ！」と嘘をついたユダヤ人青年のジルが一命を取り留めたのは嘘のおかげ。彼は、その証拠としてペルシャ語の本を掲げたわけだが、この本はトラックの中でサンドイッチを欲しがるペルシャ人と交換して貰ったものだ。それがそんな形で役に立つとは！

さらに、収容所に連行されコッホ大尉から「ペルシャ語を喋れ！」と言われたジルは、本の持ち主から唯一聞いて覚えていた「Bawbaw は父親」と答えたからすごい。「もっと話せ！」と要求するコッホ大尉に対して、ジルは母親は「アンタ」など、その後は咄嗟に思いつくまま、でたらめな単語を並べることで、無事その場を切り抜けることに。その結果、将来テヘランでレストランを開くべく、今からペルシャ語を学びたいコッホ大尉から「ペルシャ語を教えてくれ」という意外なお願いが！なるほど、なるほど。だから、本作のタイトルは『ペルシャン・レッスン』に。これは面白そう。

しかし、いかにもドイツ軍人らしく真面目に生きようとするコッホ大尉は、「読み書きはできなくて良い。1日4単語ずつ覚えれば、1週間で28単語、1カ月に120単語、1年で約1500単語。終戦まであと2年はかかるから、2000単語以上は覚えられる。」というから、このレッスンは大変だ。

■□■ジルの職場は？彼のレッスン法は？■□■

第二次世界大戦中のドイツの捕虜収容所を舞台にした『大脱走』（63年）では、野球の好きなヒルツ（スティーブ・マックイーン）はグラブとボールで遊ぶ余裕があった。しか

し、アウシュヴィッツをはじめとするユダヤ人の捕虜収容所ではそれは無理。すべての捕虜収容所はガス室に通じていたが、そんな中でもユダヤ人には“ゾンダーコマンド”という職場（特殊部隊）があったことを、私は『サウルの息子』（15年）ではじめて知った（『シネマ37』152頁）。それと同じように、本作では、コッホ大尉から“ペルシャ語の教師”という身分を与えられたジルが、更に調理室での料理人という職場を与えられたのでビックリ！

中国のTV歴史ドラマを観ていると、毒殺や毒物による堕胎の物語がたびたび登場する。そのため、皇帝の食事管理は厳格で、お毒見役が配置されていたのは当然。それに比べると、本作でもジルが調理室で働くにあたっては、手洗いの徹底などのマニュアルが教えられ、違反したら処罰されると脅かされるものの、この程度のチェックなら自分の命を犠牲にする覚悟さえ決めれば、収容所長（アレクサンダー・バイヤー）を毒殺することくらいは十分可能だ。もっとも本作は、「ペルシャン・レッスン」を描くワンイッシュ映画だから、そんな脇道の話は横に置き、本作ではジルが調理係をしながら“ペルシャ語の単語を創造”していく工夫に注目！

戦後はテヘランでレストランを開きたいと願っているコッホ大尉が覚えたい単語はまず食品や調理レストラン関係。そう考えたジルは、「皿」は「ルト」、「フォーク」は「カルス」、「パン」は「ラージ」など次々と単語を“創作”し、コッホ大尉にレッスンしていくことに。しかし、単語を創作するのは容易だが、それを確実に覚えるのは大変。しかし、それが唯一の生きるすべなら文字通り必死でやらなくちゃ！調理中でも、床に就くときでも常に単語を反芻したおかげでジルは、徐々にコッホ大尉の信用を勝ち取っていったが・・・。

■□■バディ関係の対抗軸になる、若い男女も登場！■□■

『笑の大学』では、「笑い、笑い、笑い・・・そして涙」となるストーリーの中で、検閲官と劇作家との間に生まれてくる友情のような関係が興味深かった。それと同じように、本作でも偽りの言葉を積み上げていく「ペルシャン・レッスン」という教室の中で、ジルとコッホ大尉の間で奇妙な友情のような関係が創られていくので、それに注目！

他方、本作ではそんな2人のバディ関係の対立軸として、最初からジルがペルシャ人だというのは嘘だと見抜き、折に触れて、それをコッホ大尉に密告するマックス・バイヤー兵長（ヨナス・ナイ）と、彼が惚れ込んでいる美人の女看守エルザ・シュトルンプフ（レオニー・ベネシュ）が登場し、さまざまな形で彩を添える（？）ので、それにも注目！

ある日、親衛隊員たちのピクニックに料理係として同行したジルは、その場でコッホ大尉から「木はペルシャ語で何と言う？」と聞かれ、思わずパンと同じ「ラージ」と答えたところ、「ラージはパンだ。」とジルから教えられていたコッホ大尉は激昂。自分は騙されていたと悟ったコッホ大尉はジルを激しく殴打し、マックスを監視役としてジルに過酷な労働を命じたからマックスは大喜び。新たな採石場の職場でマックスが徹底的にジルをいびり倒した結果、ジルは生死の境を彷徨う状態に。しかし、そこでもジルが誰にもわから

ないうわ言を口にしてしていると、それがペルシャ語で「母さん、家に帰りたい。」と言っていると理解したコッホ大尉は、やはりジルはホンモノのペルシャ人だと確信し、意識を取り戻した彼にレッスンを続けて欲しいと頼むことに。

そんな脚本はあまりに“出来過ぎ感”があるものの、スクリーンを観ていると、これらのストーリー展開は手に汗握るものだから、全く違和感はない。コッホ大尉とジルのボディ関係の対抗軸として登場するマックス兵長やエルザ看守も、本筋のストーリーの説得力を補強していくことに。なお、採石場で過酷な労働に従事していたジルと部隊に収容されていたイタリア人兄弟との間に生まれる“あるエピソード”も“出来過ぎ感”があるものの、きっと説得力の方が上回っているはずだ。

■□■膨大な言葉の創造は囚人の名前から！その成果は？■□■

単語や言葉の創造（＝でっち上げ）は、誰でも、いくらでもできる。また、うまくやればコマーシャルに使われたり、新語大賞を受賞することだって可能だ。しかし、コッホ大尉のような生真面目な男に、レストラン経営ができるレベルまでペルシャ語をレッスンするとなると、増えてくる言葉を覚えるのが大変。とても人間技では不可能だ。

そこでジルが思いついたのは、囚人の名前から言葉を作ること。幸いジルはコッホ大尉から囚人名簿の作成を命じられていたから、囚人に食事を配る際に名前を聞き、そのイメージの中で単語を創作すれば覚えやすいということだ。本作のパンフレットには、川本三郎氏の Review『偽の言葉による奇妙な友情』があり、そこでは「言葉に強い関心を持った作家の井上ひさしは、記憶術を売り物にする大道芸人は、モノの名前を人名になぞらえて記憶したと言っている」という話が載っている。そんな方法に気づいたジルは、例えば、「ロベルト」だと「ベルト」をとって「空腹」に、「アフラーモ」だと「ラーモ」を取って「希望」に、と人名を単語に使っていくことに。なるほど、なるほど。

■□■2人の信頼関係はこんなレベルまで！■□■

本作中盤のみどころは、何と言っても2人のレッスン風景。そのボディ関係（教師と教え子関係？）の深まりの中で生まれてくる2人の信頼関係（と言っても一方的にコッホ大尉からジルへの恩恵だが・・・）に注目！

『笑の大学』では、検閲官と劇作家との友情は結ばれることはなかったが、本作では、コッホ大尉は不安を訴えるジルに対して、生真面目なドイツ軍人らしく、「最後まで自分が守る」と約束するからビックリ。それだけでもすごいが、収容所長の命令で、すべての囚人を移動させると決まった時も、コッホ大尉は「ジルだけは残してくれ」と所長に直談判。さらに、コッホ大尉の親切が逆に重荷になったため、自ら死の行軍に加わったジルを、コッホ大尉は無理やり連れ戻そうとまでするから、その執念には驚かされる。さらに、本作ラストに向けて、ナチス・ドイツの敗色が濃くなり、収容所全体の撤退が決まり、証拠書類一切が焼却処分される時も、彼は約束通りジルを守るから、さらにビックリ！囚人名簿を含むすべての証拠を焼却処分している収容所からジルを連れだしたコッホ大尉は、ジ

ルに「幸運を」と言い残して、自分は空路テヘランへの脱出を目指すことに。

長期間にわたるペルシャン・レッスンの中で、そこまでの信頼関係が築かれていたということだ。

■ラストにみる2人の運命は？その対比に注目！■

『聖なる嘘つき その名はジェイコブ』では、隠し持っていたラジオを巡って悲しい結末を迎えたが、ナチス・ドイツに対するロシア軍の侵攻がそこまで迫っているというジェイコブの情報は、ゲットーの人々全員に生きる勇気を与えることになった。それに対して、自分はペルシャ人だと嘘をつき、コッホ大尉に対してペルシャン・レッスンをすることによって命を長らえ、さらに収容所からの脱出まで成功させたジルは、今、連合軍に保護されていた。収容所からの奇跡の脱出者だと知った連合軍の幹部は、ジルに対して、収容者名簿のことを尋ねたが、残念ながらそれはすべて焼却処分とされていた。しかし、そこでジルの口から出た驚くべき言葉は、「囚人の名前は全部覚えています。」「その数は2,800人です。」だったからビックリ！その後、燃やされてしまった囚人名簿が変わって2,800名あまりの囚人の名前がジルの口から次々と申告されていくので、その姿に注目！

他方、収容所から脱出させたジルと別れ、かねてからの計画どおり、一人空路でドイツを脱出したコッホ大尉は今、無事テヘラン空港に降り立っていた。テヘランに着けば、ジルに仕込んでもらったペルシャ語を使って、レストランの開店をはるか昔にテヘランに亡命した兄と違って、自らナチス親衛隊への入隊を希望したコッホ大尉はナチス・ドイツの敗戦を想定していたわけではないが、そうかといって、ナチスの敗北は決して悪いことではない。なぜなら、既に彼のペルシャン・レッスンは完了しているから。つまり、ナチスの敗北は、彼の第2の人生のスタートを意味しているからだ。

ナチスの軍服ではなく、スーツ姿でテヘランの空港に降り立ったコッホ大尉は、入国審査場で達者なペルシャ語(?)を駆使。「レストランを開くためテヘランにやって来た。」と説明したが、さてそのペルシャ語は通じたの？そこに見る悲劇はあまりに悲惨なもの。そんなコッホ大尉の姿を見ていると、やっぱり嘘はダメ・・・？

2022(令和4)年12月12日記